

# うたや触れあいを楽しむ遊び

- 〈学習のポイント〉
- ① わらべうたの特徴を理解しよう。
  - ② わらべうたの教育的機能について知り、保育のなかで生かすにはどうしたらいいか考えよう。
  - ③ わらべうたや手遊びを演じ、その楽しさを味わってみよう。

## 1. わらべうた

### 1 わらべうたとは

わらべうたは、伝承遊びや行事などとともに子どもたちのなかで歌い継がれてきた伝承童謡である。その発生は古く、日本書紀には「童謡（わざうた）」という表記がすでにあったとされるが、子どもたちの集団での遊びができる環境が整いつつあった室町から江戸時代になって、今日まで残るわらべうたが多く歌われるようになった（「ことろことろ」「はないちもんめ」など）。

わらべうたは、子どもたちの日常生活を基盤として、遊びや生活のなかから生まれたもので、明治期の学校唱歌や北原白秋に代表される大正デモクラシーを背景とした童謡運動のなかでつくられた創作童謡とは区別される。生活のなかで生まれ育ったわらべうたのリズムやメロディーは、日本独特の音階からなっている\*。岩井によれば、地域や時代によって、わらべうたは使用される音に違いが生まれれており、おとなの世界の音楽の影響を受けてかたちづくられたという\*\*、\*\*\*。

また、近年の心理学研究によれば、わらべうたは話しことばがもつリズムや旋律の延長上にあるらしいことが明らかになってきている。子どもがおとなからの呼びかけに同調行動をとることや、赤ちゃんに人の声や音楽に共通する協和音を好む傾向があり、喃語なんごとリズムミクな身体運動が同期するという研究結果は、ことばと音楽、ことばとリズムが密接な関連をもって育っていくことを推測させる\*\*\*\*。

母親から子どもにかけられることばが特定の抑揚はくや拍をとともなうものであることはよく知られている。そのもっとも原初的なかたちは、子どもの発声に対するおとなの返答や名前を呼ぶときのかげ声（呼びかけことば）であり、子どもをあやすときのことば（あやしことば）である。これら子どもに向けてかけられる声は普段より少し高く、ゆっくりになるという特徴をもっている。子ども向けにうたを歌う場合にも音は高くなり、テンポはゆっくりになるという\*\*\*\*\*。

\*両端に安定した各音がある完全4度の枠をテトラコードという。日本の音楽は、①民謡、②律、③都節、④琉球の4種類のテトラコードをもっているが、わらべうたはこのうち①民謡、③都節のテトラコードを基礎とするものが多い。民謡が、集団労働における作業の統一のためにつくられた労働歌であることや（上 笙一郎「日本のわらべ歌」）、都節のテトラコードが江戸期のおとなのうたや音楽に多く使われたことを考えると、わらべうたが民謡や都節のテトラコードをもち、子どもの遊びのなかで歌われてきたことは興味深い。

\*\*岩井は、「ずいずいずころばし」「江戸子守歌」を例に、それぞれの曲で、都市部の子どもは、「シ」と「ラ」「ミ」を半音下げて歌っていたことに着目し、大正から昭和にかけて都市部の子どもたちが、三味線や箏など、おとなの世界の曲に日常的に触れていた影響と指摘している。

わらべうたは、呼びかけが使われるものも多く、子どもの発声しやすい5～6音程度の音域の音からなっている。単純なリズムで繰り返しが多く、日本語のイントネーションに近い付点音符が使われることも多い。つまり、わらべうたはことばと音楽の間にあるような特徴をもっている。

わらべうたは、伝承される過程で、子どもが自分で歌いやすい音階で歌ったり、簡単に歌詞をかえたりすることによって、リズムやメロディー、遊び方やことばまでさまざまに変化する柔軟性をもっている。わらべうたというと「遠い昔のうた」というイメージがあるが、子どもの遊びや生活のなかで歌われ、伝えられ、再創造される「いま、子どもの生活に生きているうた」であることを認識しておく必要がある。残念ながら、わらべうたは意識的に取り上げないと、少子化や子どもの異年齢地域集団の崩壊などによって、子どもの生活のなかで伝承されることがむずかしくなってきた。しかし、わらべうたは本来、「人と人をつなぐうた」であることを考えると、わらべうたがもっている豊かな教育力を保育に活かすことによって、子どものことばを人とのつながりとともに育てることができると可能性をもっている。

\*\*\*岩井正浩「わらべうたは子どもの生命」大島清・大熊進子・岩井正浩編『わらべうたが子どもを救う』pp.197-200, 健康ジャーナル社, 2002

\*\*\*\*江尻桂子・正高信男「乳児における喃語と身体運動の同期現象Ⅱ」『心理学研究』p.69, pp.433-440

\*\*\*\*正高信男「子どもはことばをからだで覚える」中央公論社, 2001

## 2 わらべうたの教育力

### (1) ことばのリズムからわらべうたへ

先述した通り、わらべうたは、子どもとともにある生活や子どもたちの遊びのなかから生まれ、それぞれの時代や生活環境・地域性を反映しながら、変化してきた。おとなから子どもへの語りかけの抑揚やリズムと共通するわらべうたがもつ素朴な音楽性と双方向性は、同時にことばの発達の土台となる。子どもの発達初期においては、ことばとわらべうたは、この点でほとんど同じ意味をもつ。初期においては混沌としているこれらの表現は、子どもの発達にともなって、より豊かなことばや音楽的な経験を経て、ことばの系と音楽の系へと分化していく。

わらべうたのもっとも素朴なかたちといえるのは、母親が子どもをあやしたり語りかけるときの抑揚のついたことばである（譜例1・2）。歌うように唱えられるこうしたことばは素朴な二音歌となり、「唱えことば」「唱えごと」と呼ばれている。「唱えことば」はどの民族にも存在し、それぞれの民族の言語に密着しているという\*。

\*佐藤志美子「心育てのわらべうた」p.178, ひとなる書房, 1996

譜例 1



## 譜例2



自分から積極的に周囲のおとなに働きかけることのできない乳児に、母親や保育者が愛情をこめて語りかけ、歌いかけるわらべうたは、子どもとの愛や信頼関係を具体的に表現し、伝えるもので、おとな自身の子どもへの関わりを容易にするとともに、子どもにわかりやすくおとなの愛情を伝え、おとなに対する関心を深め、関わりのおきかけを提供しているといえる。

また、子ども同士が友だちを遊びに誘ったり、遊びのなかで簡単なやりとりをするとき（譜例3, 4）、また、ものを選ぶ際に口ずさむ「どれにしようかな」（譜例5）のように自然に唱えられるわらべうた（唱えことば）は共通して、節がつくことによって、ことばを発したり、人やもの、できごとへの関わりを容易にしている。

こうしたやりとりには日本語との深い関わりが認められる。たとえば、譜例4にあるように、「かして」のリズムは「か」で1拍、「し」で1拍、「て」で1拍と、1語1拍という日本語の特徴を反映している。また、譜例5は「ファ」と「ソ」の2音できているが、日本の場合、長2度の場合、高い音、つまりここでは「ソ」で終止するという特徴をもっている。日本語独特の音程感、前述の拍感やリズム感はことばとともに獲得されていくのである。

## 譜例3（かよちゃん あそびましょ）



## 譜例4（かして いいよ）



## 譜例5 (どれにしようかな)



日常使われることばに節がつくと、そのことばは発しやすく、友だちに声をかけたり、「かして」「いいよ」のような節のついたやりとりが、人間関係をスムーズにする。節のついたことばはそこでのやりとりを儀式的になものになっていると考えられるが、子どもの遊びの様子を観察していると、たとえば、ものの貸し借りをし始める時期の子どもには、そのやりとりが儀式的であることによって、子ども同士の交流を支えていると思われることが少なくない。

乳児期から幼児期へと成長する過程で、子どもは家庭以外の人たちと関わりを広げていく。わらべうたは、子どもの遊びうたとして、子ども同士の遊びのなかであったり、保育所・幼稚園・小学校などの子ども集団のなかで行われるようになる。

集団で行われるわらべうたは、子どもたちの遊びのなかで、子ども同士の関わりを容易にし、一緒に遊ぶことの楽しさを味わうといった社会性や集団性を育てる要素をもっている。その意味で、わらべうたが集団を育て、その集団のなかでわらべうたがより楽しいものとなるといえる。子どもたちは、わらべうた遊びを通して、皆で遊ぶことの楽しさを味わい、その楽しさのなかで自分の役割を理解し、ルールに従って行動することによって楽しく遊べることを経験する。そして、子どもたち一人ひとりが生き生きと活動し、集団で行動する大切さと楽しさを体験することができる。

### (2) わらべうたの音楽性

歌いながら遊ぶわらべうたは、幼児の音楽表現そのものであり、「ことば」「音楽」「身体表現」が一体化された総合的音楽活動である。

わらべうたを音楽的観点からみると、次にみられる譜例6～14も含め、これまで出てきた譜例のように、①2拍子、4拍子である、②曲の長さは4小節から12小節程度の短いものが多く、繰り返しによって発展する、③日本語のイントネーションにもっともあっていて、付点音符が多く用いられる、④リズムは単純で繰り返しが多い、⑤音域は狭く、幼児の音域にかなっている、という特徴がある。

## 譜例6

## げんこつやまのたぬきさん

わらべうた

げんこつやまのたぬきさん  
おっばいのんでねんねして  
だっこしておんぶしてまたあした

## 譜例7

## せんべせんべ

わらべうた

せんべせんべやけたどのせんべやけた  
このせんべやけたムシャムシャムシャ

## 譜例8

## いも虫ごろごろ

わらべうた

いもむしごろごろひょうたんぼっくりこ

## 譜例9

## かりうどさん

わらべうた

かりうどさんかりうどさんきょうのえものはなーに

譜例 10

いっぽんばし こちょこちょ

わらべうた

いっ ぽん ば し こ ちょこちょ す べ っ て た た い て  
 つ ね っ て か い だ ん の ぼ っ て コ チョコ チョ

譜例 11

おてらのおしょうさん

わらべうた

お て ら の お しょう さん が か ぼ ち ゃ の た ね を ま き ま し た  
 め が で て ふ く ら ん で は な が さ い た ら ジ ャ ン ケ ン ボ ン

譜例 12

じごくごくらく

わらべうた

じ ご く ご く ら く え ん ま さん は こ わ い は り の や ま へ と ん で ゆ け

譜例 13

おちゃらかホイ

わらべうた

お ちゃ ら か お ちゃ ら か お ちゃ ら か ホ イ  
 お ちゃ ら か か っ た よ お ちゃ ら か ホ イ

## 譜例 14

## あぶくたつた

わらべうた

あぶく たつた にえたつ た にえたか どう だか

たべてみ よ ムシムシ ムシ まだにえ ない

あぶく たつた にえたつ た にえたか どう だか

たべてみ よ ムシムシ ムシ もうにえ た

このように、わらべうたは、音程・リズム・旋律が覚えやすく、子どもたちにとって自然な歌い方ができるうたであり、身近で親しみやすいうたである。

## (3) 乳幼児に対する音楽の指導法とわらべうた

乳幼児に対する音楽指導法としてわらべうたは広く使われるようになっているが、それはわらべうたがもつ日常性や具体性が、子どもの発達特性に見合ったものであるという保育者がもつ経験知による面が少なくない。

しかし、わらべうたが乳幼児期の音楽の指導に生かされてきた背景には、前述した大正期の童謡運動だけでなく、スイスの作曲家ダルクローズ（1865-1950）によるリトミック、ハンガリーの音楽教育家コダーイ（1881-1945）らによるコダーイ・システム、ドイツの作曲家オルフ（1895-1982）の音楽教育論などを理論的背景としている。

リトミックが保育に用いられるようになったのは、『窓ぎわのトットちゃん』（講談社刊）で有名な成城幼稚園の小林宗作によるとされている。小林によればリトミックは「心と体にリズムを理解させる遊戯」であり、「音楽や舞踏のなかに渾然と隠れたまま取り扱われることが大切」であるという。わらべうたや手遊びも同様に遊びのなかにリズムをはじめ、その音楽的要素が含まれている。

コダーイは、音楽的母国語から音楽学習を始めれば、音楽の習得は容易であると考え、基本的教材として民族音楽に着目した。とくに、わらべうたを民族音楽

の原初的なかたちであるとして、最初の教材に位置づけている。また、幼児期の音楽体験を、聴く力、集中力、刺激や感情などとともに育てることを重視するなど、今日の保育の原理に共通する点も多く、子どもの母国語のリズムやイントネーションを重視する内容は、日本の保育にも大きな影響を与えてきた。

オルフは「音」と「動き」と「ことば」が一体となって音楽が成り立つと考え、母国語、即興表現、繰り返し（オスティナート）、楽器としての体などを重視する。音楽をことばや体と切り離すことのできないものとするオルフの音楽観と教育観は、今日の保育につながる重要な視点である。

ここでは3人の先達の理論を簡単に紹介したが、わらべうたがもつ音楽性を、子どもの生活や人格の全面的発達と考えあわせるこれらの視点は、保育においてとくに重要なものである。

### 3 わらべうたの分類

わらべうたの分類は、文学的（ことば）研究の視点から、また音楽的（リズム・旋律・音階）研究の視点などから、その専門家によって分類法はさまざまである。

たとえば、小泉文夫氏は「子どものうた遊び」であるという観点から、『わらべうたの研究』のなかで、わらべうたの遊び方によって10種類に分類している<sup>\*, \*\*</sup>。

わらべうたが保育の場でどのような意味をもち、どのような指導がなされるべきか、また子どもにどのように影響を与えるのか、といった観点からとらえようとするなら、佐藤による遊び方と隊形による分類が参考になる（表6-1）。それぞれの保育の場においてわらべうたをどのように活かすかという観点から、独自に分類を考えてみるのもよいだろう。

\*①となえうた ②絵かきうた ③おはじき・石けりなど ④おてだま・はねつきなど ⑤まりつき ⑥なわとび・ゴムなわ ⑦じゃんけん・グー・チョキ・パーあそび ⑧お手合わせ ⑨からだあそび ⑩鬼あそび  
\*\*小泉文夫『わらべうたの研究』、稲葉印刷所、1969



表6-1 わらべうたの分類&lt;遊び方と隊形による&gt;

	遊びの型	要点・指導内容など
遊び方	・動作あそび	顔 … 顔の部位、名称、各部位の特徴を知る、各部位の動き方、働きを知る。特に口の動きを見ることで発声の準備になる。 手 … 手指の名称、各指のそれぞれの働き、右・左手の表情（開く、にぎる、特定の指使い、動きの多様さ、体の部位との関連）
	・身ぶりあそび	体全体の動き、歩行やステップとの関連、具象物の模倣、流れとリズム、方向や移動、手と顔との連携動作、表情の工夫
	・ジャンケンあそび	ジャンケン勝負のルール、タイミング、即応動作、勝負時の心理コントロール、歌との一致、新しいルールの創作、相手の把握
	・鬼あそび	鬼ごっこ、鬼あてごっこ…ルールの理解、即応したすばい動き、体のバランス、耐えること、攻撃、協調、予見、目的意識、表情、仲間づくり、緊張、脱落、繰り返しの楽しさ、役割
	・減り増えあそび	交代のルール、役割意識、協調、歩行のバランス、所属感、遊びの流れ、減り増えへの喜びと不安、仲間意識
	・手合わせあそび	拍の一致、テンポ感、歌との一致、表情、リズムの先取り、終始感、組み意識、手指動作の即応、全体の流れ、パートナー交代
	・物語あそび	表情、想像力、想像表現、協力、役づくり、情景把握、所属感、役割り分担、演じてたのしむ、流れの工夫、物語（起承転結）
隊形	・門くぐり	遊びの流れ、偶然性、期待と不安、歩行の大切さ、交代のルール、表情
	・円陣・円座	円歩行、表情表現、リーダー意識、交代のタイミング、歌と動きの一致、仲間意識、集団の動き、テンポの変化、山場づくり、繰り返す
	・隊列	統一した動き、縦歩行、横列交代、隊列の変化への対応
	・その他 組・群れ・個々	相手との協調と対応、表情表現、組づくりの工夫、集団と組、個の係わり、隊型と組、拍、テンポの一致

（出典：佐藤志美子『心育てのわらべうた』ひとなる書房、1996より一部改変）

#### 4 わらべうたの実際

わらべうたの特徴は、「歌うこと」と「遊ぶこと」が不可分に結びついているという点にある。このことは、子どもたちにとって「遊び」のためのうたであることを意味する。したがって、わらべうたのなかでは子どもたち一人ひとりが主人公として参加できるものである。また、遊び集団として意識的に人との関わりをもちながら、一緒に遊ぶことで集団としても、それぞれにとってもその楽しさは高まっていくという特徴がある。そして、同時に子どもたちの音楽性を育てるのがわらべうたであるといえる。

### (1) 1対1から集団へ

わらべうたのなかでも、もっとも素朴なかたちである。基本的には1対1から遊び始めるが、集団でも遊ぶことができる。集団遊びという要素は薄く、拍にあわせてこぶしでひざを打つ遊びで、曲は異なるが、手遊びといってもよく、現代の手遊びの素朴なかたちともいえる。2～3歳児で遊ぶのに適している。

#### 譜例 15

### でーろ



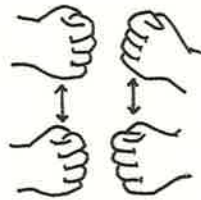
①でーろでーろ

②つのだせ でー

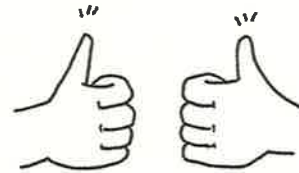
③ろ



手をグーにして、  
軽く足のひざをたたく。



握りこぶしを  
上下にふる。



「ろ」で、  
両手の親指を立てる。

### (2) 2人組が基本となる集団遊び

2人組で息を合わせて遊ぶ。同時に、集団のなかで皆に合わせながら遊ぶが、合わせる自分の相手、ひとりに注意を向けるという点で、集団遊びといってもむずかしくはない。3～4歳児で遊ぶのに適している。

## 譜例 16

## くまさん くまさん

わらべうた

くまさん くまさん まわれみぎ

くまさん くまさん りょうてをついて

くまさん くまさん かたあしあげて

くまさん くまさん さようなら

①くまさん くまさん



手拍子をする。

②まわれみぎ



手をつないでまわる。

③くまさん くまさん



①と同じ。

④りょうてをついて

お互いの両方の手のひらを  
合わせる。

⑤くまさん くまさん



①と同じ。

⑥かたあしあげて

かた足をあげて、  
軽くジャンプする。

⑦くまさん くまさん



①と同じ。

⑧さようなら

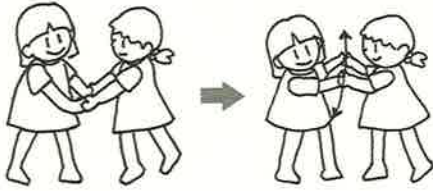
「さようなら」の挨拶  
(おじぎ)をする。

# なべなべ

わらべうた



①なべなべ そこぬけ



向かい合って手をつなぎ、左右にふる。

②そこがぬけたら



つないだ手の片方を上にあげる。

③かえりま



あげた手の下をくぐる。

④しよ



背中合わせになる。

⑤なべなべ...そこがぬけたら



背中合わせのままで①~②の動作を繰り返す。

⑥かえりま



あげた手の下をくぐる。

⑦しよ



最初の向き合った体勢に戻る。

## (3) 役の交代がある遊び

集団での遊びでも、偶然に役の交代がある遊び。偶然オニになることがあり、役割を意識して、受け入れられることが必要。全体とそのなかでの自分を意識する必要があり、それが「ドキドキする」遊びの高揚感を生み出す。4～5歳児で遊ぶのに適している。

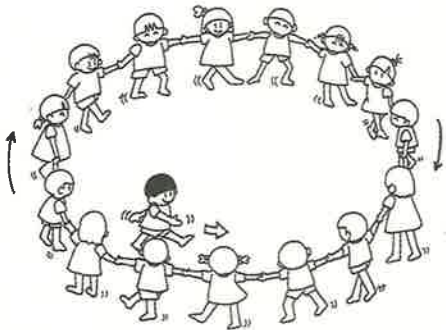
## 譜例 18

## お茶をのみに

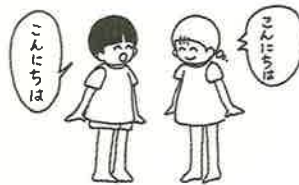
わらべうた



お ちゃを の みに きてく ださい はい  
こん にち は いろ いろ おせ わに  
なり まし た はい さよ うな ら



①手をつないでまわる輪。オニは輪のなかを逆行。「きてください」の「さい」で輪は手を離す。



②オニは近くの子の前にとまり、「はい」で向きあい、「こんにちは」でおじぎをする。相手の子もおじぎをする。



③「いろいろ」から2人は手をとりあってまわる。

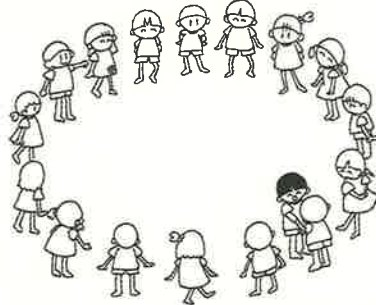
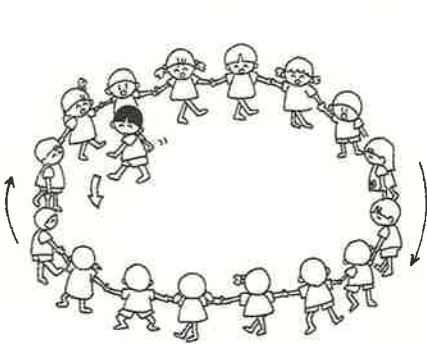


④「なりました」の「た」でオニと輪のなかの子が入れかわり、「はい」で手を離して向きあい、「さようなら」でおじぎをする。

# かわのきわの

わらべうた

か わ の き わ の み ず ぐ る ま  
 く る り と ま わ る は み ず ぐ る ま  
 み ん な い そ い で ふ た り づ れ の こ  
 り は お に よ イ ニ サ ン



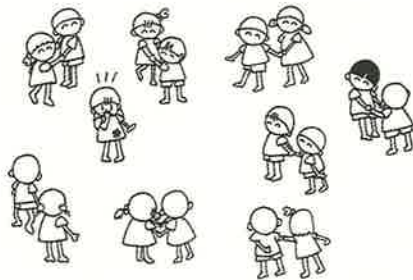
- ①手をつなぎ円をつくる。歌いながら左方向へ歩く。オニは円のなかについて右方向へ歩く。「のこりはオニよ」で止まり、向きあう。

- ②「イチニサン」で3つ手拍子。次の拍で2人組になる。オニは向きあった子と組になる。残った子がオニになる。

- ③「イチニサン」がどんどん速くなるので、しっかり3つ手拍子をする。

■展開

- ①毎回組む相手を変える。
- ②「2人づれ」「3人づれ」というように変えてみるのもよい。
- ③輪のなかのオニを複数にしてもよい。



## (4) ゲームの要素が入った遊び

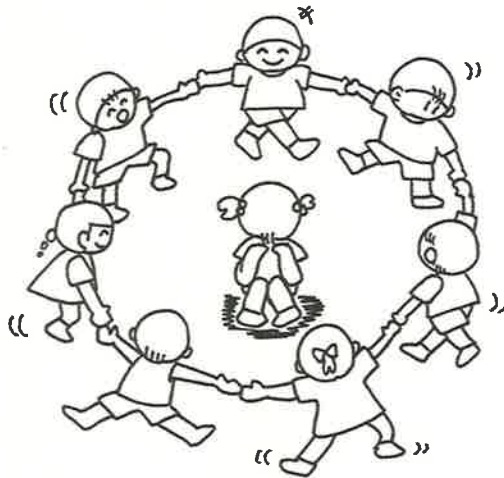
集団での遊びのなかでも、ゲームの要素が強くなり、人当て、オニ当てがある遊び。「あめかあられか」は声で友だちの名前を当てるため、集団としての仲間意識や友だちへの関心が育っていることが必要。「さらばたし」は持っている「ふり」をしたり、オニから手のなかが見えないようにする技能も必要。5歳児～小学生に適している。

## 譜例 20

## あめかあられか

わらべうた

あめかあられか てっぼうか うめにうぐいす  
ほうほけきよ それともいしのじぞうさまか



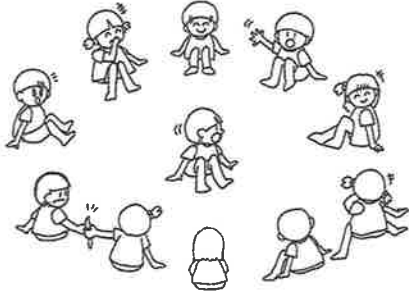
- ①オニは、円のなかで顔をふせて座る。ほかの子どもは手をつないで円をつくり、歌いながら歩く。
- ②うたの後、オニが下の3つのことばのなかからどれかをひとつ選んで言う。
- ③オニのうしろの子がそれに対応する下のことばを答える。オニはその声を聞いて、誰かを当てる。

(鬼)	.....	(子)
うめ	.....	ぼっぼっ
うぐいす	.....	ほーほけきよ
おじぞうさん	.....	んー

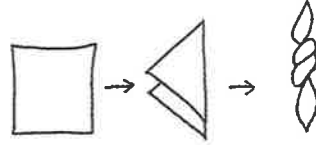
# さらばたし

わらべうた

さらばたし さらばたし しずかに わたせ こがねの ゆめ  
おにの しらぬまに だれのてにもってるか



①まるくなって座り、真ん中にオニが入る。



②消しゴムやハンカチなどを結んだものを、宝とする。



③歌いながら宝を回していく。  
(手あわせするように「1」で自分の手、「2」で右手を右隣りの子の左手と打ちあわせる)



④「だれのてにもってるか」で全員腕を組み、宝をかくす。



⑤オニは宝がどこへいくか見ている。うたが終わったら宝を持っている子を当てる。



## 2. 手遊び・うた遊び

### 1 手遊びとは

手遊びは、うたと動作がひとつになったもので、メロディーやリズムに合わせて手や体を動かして遊ぶ「うた遊び」である。わらべうたが日本語の影響を強く受け、使われる音が限定的である、とくに集団遊びのなかで歌われてきたなどの特徴があるのに対して、手遊びは、西洋から入ってきた音楽的特徴を含め、集団遊びというより手指や体の動きを音楽的要素とともに楽しむという特徴をもつ。もちろん、明確に区分できるわけではなく、わらべうたのなかには手遊びと呼んでよいものもある。

手遊びは、人数や場所を問わず、体と声だけで遊ぶことのできる、もっとも簡単に身近なうた遊びのひとつである。

### 2 手遊びが育てるもの

#### (1) 楽しさのなかで信頼と自主性を育てる

わらべうた同様、うたと動作が一体化した手遊びは、手と手・体と体が触れあうことによってコミュニケーションをとることができ、親と子、保育者と子どもたち、また子ども同士の間に関係感や安心感を育むものとして大切な役割を果たす。また、その楽しさによって、子どもが自ら、「第2の脳」といわれる手指を、体とともにメロディーやリズムに合わせて動かす動因となり、脳の働きを活発にし、リズム感や運動機能、記憶系の能力を発達させることができる。

#### (2) 体への気づき

手遊びは、狭義にはとくにその手指の動きを楽しむものといえるが、広く考えれば、子どもの発達の原則に則して、たとえば運動面では大筋肉運動から末端の微細な運動を楽しむものへと発展していく。子どもは保育者の動きをまねながら、次第に自分の体を動きとともに意識していくようになり、指先の微細な動き（譜例 22）や、体をコントロールする能力（譜例 23）を育てていく。

譜例 22

# いっぽんにごほんで

作詞/作曲：不明



いっぽんにごほんでたこやきたべて にほんにごほんでラーメンたべて さんぽんにごほんでケーキをたべて よんぽんにごほんでカレーライスたべて

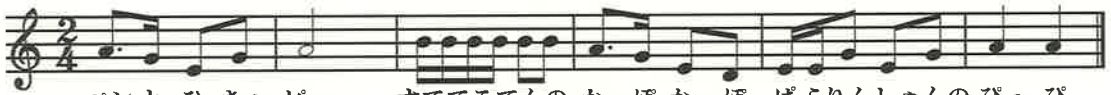


ごほんにごほんでおにぎりつくって ピク ニック ヤッ



譜例 23

# すててこてん



ペンと ひきや ピュー すててこてんのかっぱ かっぱ ぼらりんしゃんのびっぴ



ひとつひとつの和楽器を演奏するまねをしながら、繰り返し歌って遊ぶ。

## (3) 表現の広がりと創造性

わらべうたが子どもたちの遊びのなかで地域や世代によって変化することは前述した通りであるが、手遊びも同様に柔軟に変化する。そのメロディーの多様さと豊かさは、アニメーションなどを含め、現代の子どもの文化を反映し、替えたとしてまったく異なる歌詞として歌われることも少なくない。どこまでも広がる子どもの想像は、とくに幼児期の大きな特徴であるが、こうした創造性を許容する広がりを手遊びはもっている（譜例 24 とその応用）。

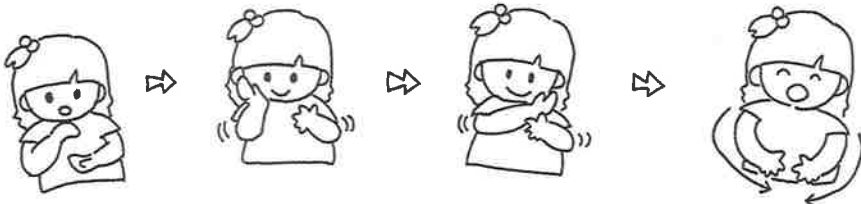
また、知っているうたが、子どもの表現を容易にし、支えることがときどきある。「しってるー」と子どもはよく使うが、知っていることが自信となり、表現を支えるのである。たとえば、「大きな栗の木の下で」を「バナナの木」や「リンゴの木」にアレンジすると、子どもは最初から元気よく自信に満ちた様子で楽しんで遊ぶことができる（譜例 25）。

## 譜例 24

## おはぎ

アメリカ民謡

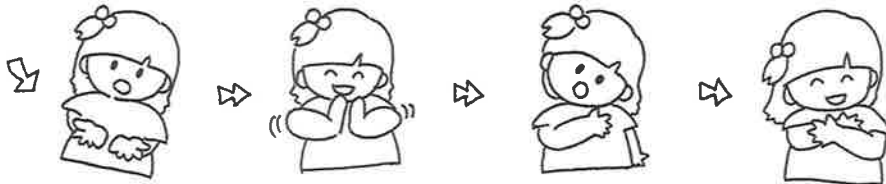
おはぎがおよめに ゆくときは あんこときなこで けしょうして  
 まあるいおぼんに のせられて ついたところが おうせつま

①おはぎがおよめに  
ゆくときは

②あんこときなこで

③けしょうして

④まるいおぼんに



⑤のせられて

⑥ついたところは

⑦おうせつ

⑧ま

【譜例 24 の応用】 アンパンマン (「おはぎ」と同じ曲で)



①アンパンマンが



②おでかけするときは



③マントと



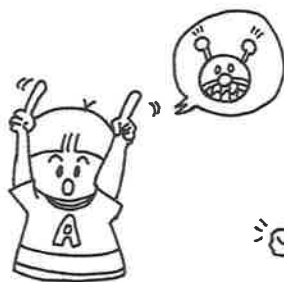
④ベルトでしたくして



⑤ゆうきもりもり



⑥たくわえて



⑦バイキンマンを



⑧やっつけろ



⑨あーんパーンチ!

譜例 25

大きなバナナの木の下で

詞・曲 不明

お お き な バ ナ ナ の き の し た で <バナナ> あ な ー た と わ た し <バナナ>  
 な か よ く あ そ び ま し ょ <バナナ> お お き な バ ナ ナ の き の し た で <バナナ>

① おおきな  
 ② バナナの  
 ③ きの  
 ④ した  
 ⑤ ー  
 ⑥ (バナナ!)  
 ⑦ あなーたと  
 ⑧ わたし  
 ⑨ (バナナ!)  
 ⑩ なか  
 ⑪ よく  
 ⑫ あそびま  
 ⑬ しょう  
 ⑭ (バナナ!)  
 ⑮ ⑭までいったら①から⑥を繰り返す

### 3 子どもの発達と手遊び

保育の場で手遊びを行うとき、子どもたちにどんな手遊びを選んだらよいか、どんな手遊びを子どもたちが好むのか、またその使い方について、年齢ごとに考えてみたい。

#### (1) 0～1歳児

乳児は、生後6カ月を過ぎると急速な発育・発達がみられ、座る・はう・立つといった運動や姿勢の発達が、子どもの遊びや生活を変化させる。お座りができるようになると、座ったまま歌声や音楽に合わせて体を前後や左右に動かし、音楽に体の動きで反応しようとし始める。つかまり立ちができるようになるころには、音楽に合わせてリズムカルに全身を動かすようになる。さらに、つまむ、叩く、ひっぱるなど手や指を使った遊びができるようになる。

おとなへの信頼感を基盤に、子どもの手遊びはおとなの動作を模倣することから始まる。保育者の優しい歌声や音楽を聴かせる機会を豊富にし、子どもが好きな手遊びうたを繰り返し取り入れて満足感を味わえるようにし、保育者を見てまねしながら一緒に楽しむ喜びを味わえるようにすることが大切である。

#### (2) 2～3歳児

この時期には、歩行も安定し、ことばも飛躍的に増える。無意識におとなのまねをしたり自分の思いを表情や体で表していたのとは違い、意識的に表そうとするようになるため、声や動作をまねる能力が著しく発達する。音楽が聞こえると、体を動かしたり、手を叩いたり、足をトントン動かす動作もみられるようになり、積極的に音楽に興味を示す。

走る、跳ぶなどの基本的な運動機能が発達し、体を自分の思うように動かすことができるようになると、音楽に合わせて体を動かすことを好むようになり、ことばの獲得も進んで歌詞の意味も理解できるようになる。

身近な音楽に親しみ、それに合わせた体の動きを楽しめるように、全身を使う手遊びを取り入れる。子どもの自発的な活動を大切にしながら、保育者と一緒に遊ぶ楽しみが味わえるようにすることが大切である。

#### (3) 4～6歳児

友だち同士や数名のグループで遊ぶことを好むようになり、単純な動作だけの手遊び・うた遊びだけでは満足できないこともある。微細な手指の操作もできるようになるので、指先を使う手遊びや、ユーモアのある手遊びなども楽しめる（譜例26）。テレビなどで見る日常頻繁に接するものだけでなく、わらべうたなど、日常では触れることのない子ども文化にも積極的に触れさせ、遊びや経験を広げることが望まれる。

譜例 26

とんとんとんとんひげじいさん (アレンジ)

J=128 F 作詞者不詳 / 玉山英光 作曲 / 田中英夫 編曲

とんとんとんとん ひげじいさん ビョーン とんとんとんとん こぶじいさん パーン

F Bb C

とんとんとんとん てんぐさん ポキッ とんとんとんとん めがねさん ガチャッ パシャッ

F Fdim Gm C7 F

とんとんとんとん てはうえに ひらひら ひらひら てはおひざ

「ひげじいさん」はどんな人? 振った手でいろいろな顔ができます。

パーン

① とんとんとんとん

② ひげじいさん

③ ①を繰り返す

④ こぶじいさん

⑤ ①を繰り返す

⑥ てんぐさん

⑦ ①を繰り返す

⑧ めがねさん

⑨ ①を繰り返す

⑩ てはうえに

⑪ ひら ひら ひら ひら

⑫ てはおひざ

#### 4 指導者の留意点

手遊びは、場所を選ばず、道具を使わないので、いつでもどこでも手軽に楽しむことができる。たとえば、保育所や幼稚園での活動と活動の間や移動のバスの車中などで使われている。

そこで保育者が気をつけなければならない点は、手遊びを、単に子どもを静かにさせる、集中させる「便利な道具」として使うのではなく、手遊びがもつ教育的側面を大切にして、子どもが主体的に活動に参加したり、表現することを動機づけ、楽しむことである。

保育者は多くの手遊びやわらべうたを身につけておくことが大切であり、子どもの状態や場面に応じてふさわしい遊びを展開することができるようにしたいものである。また、保育者自身が手遊びやわらべうたのモデルになることを意識して、子どもに明確にわかるようにうたい、動きをはっきりと行って、その音楽的資質を高められるようにしたい。

#### 【参考文献】

本間雅夫・鈴木敏朗『わらべうたによる音楽教育』自由現代社、1982

岩井正浩「わらべうたは子どもの「生命」」大島清・大熊進子・岩井正浩『わらべうたが子どもを救う』健康ジャーナル社、2002

江尻桂子・正高信男「乳児における喃語と身体運動の同期現象Ⅱ」『心理学研究』Vol.69, No.6, 日本心理学会

正高信男『子どもはことばをからだで覚える』中央公論新社、2001

佐藤志美子『心育てのわらべうた』ひとなる書房、1996

小泉文夫（編）『わらべうたの研究—第2・研究編』稲葉印刷所、1969